

小千谷縮の魅力

Attractive properties of Ojya-Chijimi

竹本由美子 武庫川女子大学 助教
奥野 温子 武庫川女子大学 教授

Yumiko Takemoto Research Associate,
Mukogawa Women's University
Tsumuko Okuno Professor,
Mukogawa Women's University

概要

“麻”は、高温多湿の日本において、今では夏用衣料の代表的な素材となっているが、かつては庶民の布として四季を通じて着用されていた。綿の栽培技術が発達し木綿が麻同様に安価になるまでは、真冬の寒い時期にも重ね着をしたり刺し子や衿にするなど、麻は様々な工夫を凝らして用いられていたのである。一方、奈良の正倉院の宝物の中には、庸布として献納されたとされる麻布が所蔵されている。庶民の布であった麻布は、税の対象となったことで生産技術が磨かれ、麻の中でも細い糸で柔らかい上等の麻布を織れることから苧麻の栽培地も増大し、麻布の生産地も多くなり、献上品となる上等の麻布が各地で織られるようになった。その後、戦国時代においても、麻は鎧兜の裏地や陣幕などの素材としても欠かせず各藩で生産が奨励され、着心地の良い麻織物が武士や上流階級に愛用された。そして、江戸時代になると上等の麻布は「上布（じょうふ）」と言われるようになり、各産地において越後上布、近江上布、薩摩上布、能登上布、奈良上布等と呼ばれるようになった。

この数ある上布の中でも、最初に日本の重要無形文化財に指定されたのが、越後上布に“縮（シワ）”加工を施し、麻の硬い風合いに独特の柔らかさをあたえた「越後縮」、今の「小千谷縮・越後上布」である。しゃりっとした感触と冷やりとした涼しさを備えた小千谷縮は、湿気の多い我が国において古くから好まれ、その技法を守り引き継がれた伝統工芸品としての価値は、賞賛されるべきものである。

しかし、日本の衣生活の洋装化につれて、その需要は減少の一途を辿り、趣味的に一部で賞用されるのみで、若い世代にはあまり知られていないのが現状である。今後は、伝統工芸品が本来持っている性能を活かしながら、新たな価値提案をおこなうことで新しい魅力あるものを創りだし、顧客層のすそ野を広げていくことが求められる。その一つの試みとして、地場産業の発展に取り組む企業によって、小千谷縮を取り入れた軽くて豪華な花嫁の打掛と、小千谷縮を惜しみなく使用し、その張りがデザインに見事に生かされたウェディングドレスがこの程完成をみたので注目した。これらは、伝統工芸のもてる長所を遺憾なく発揮して、ブランド価値を再構築する上で一役を担うもので、日本文化への理解を浸透させる上でも大いに期待されるものである。また一方では、近年の猛暑が続く中で、節電とエコに貢献し、夏を快適に過ごす工夫として小千谷縮のシーツへ

の利用や、インテリア素材としてすでに上市されている。

本稿では、小千谷の雪国文化の特質を活かした技法によって製作された小千谷縮の特性を、実験によって評価した。さらに、その特性や独特の風合いを活かしつつ、これまでと異なった小千谷縮の魅力を引き出し、現代生活に適合した新たな可能性を示すものとして、花嫁衣装への試みを紹介するとともに、小千谷縮のブランド的価値を被服材料の視点から解説する。

1. 小千谷縮の誕生と製作工程

縄文中期頃に誕生したとされる越後の麻布は、長きにわたり苧麻栽培と生産が奨励され、越後の名産として発展した。中でも、特に糸が細く上質な越後上布は、現在も珍重されている。

一方、寛文期（1661～1673年）に、小千谷辺りに居住を構えた播磨明石藩の浪人、堀次郎将俊（明石次郎）が、越後布を見て改良を思いつき、緯糸に強い撚りをかけて製織、仕上げの工程で布に縮を与え、越後の「縮（ちぢみ）」が誕生した¹⁾。さらに、原料である青苧の績み方、晒し方にも改良を加え、従来の越後布に革命的な成果をもたらしたようである²⁾。

縮は、緯糸に経糸のおよそ倍の強い撚りをかけ、糊付けして固定して織り上げた布を、図1のように糊を何度も「湯もみ」して洗い流し、撚りがもとに戻る力で表面にしぼが形成（しぼ立て）されたものである³⁾。このしぼのある縮布は、さらりとした着心地が暑い夏に適していたことから、元禄期（1688～1704年）には幕府が武士の式服と定めたこともあり²⁾、需要が増大し最盛期をむかえた。しかしその後は、明治の近代化の影響や戦中に産地が壊滅状態になるなど、幾度も存続の危機に見舞われながらも、縮産業の中心地であった小千谷で技術継承の努力が重ねられた。その先人達の尽力によって、1955年に「越後縮」が重要無形文化財に指定され、その後、1960年には指定名称を「小千谷縮・越後上布」へ変更した³⁾。そして2009年に、「小千谷縮・越後上布」は、昔ながらの原料である苧麻を用い、図2の「雪晒し」など小千谷の雪国文化の特質を活かした加工技術全般にわたる、純粋な古法を伝える貴重性が高く評価され、ユネスコ無形文化遺産として登録されたのである。

重要無形文化財の「小千谷縮・越後上布」は60以上の工程によって製作されており、その中で次の5つの工程が指定条件³⁾となっている。

キーワード：小千谷縮、苧麻、しぼ、湯もみ、花嫁衣装

- 1) 全て苧麻を手績みした糸を使用すること
- 2) 緋模様をつけるときは手くびりによること
- 3) いざり機で織ること
- 4) しぼとりをする場合は湯もみ、足踏みによること
- 5) 仕上げは雪晒しとすること

手くびりとは、防染のためにくびり糸（綿糸や古苧）で細かく巻いていく技法²⁾である。織り上った越後上布は、糊や汚れを落としながら布を柔らかくし、布目を詰ませるための足踏みをおこない、小千谷縮は前述のように湯もみによってしぼ立てをおこなう。また、織りあがった反物は、春先の天候の良い日に雪上に広げて晒す（図2）ことで、天然の漂白効果があるとされている¹⁾。雪が太陽熱で溶けて蒸発する際に、その水蒸気が太陽光と雪からの反射光による紫外線を吸収すると、オゾンが生成される。このオゾンの働きによって、色物は色目が落ち着き、白物はさらに白さが増すのである^{5,6)}。



図1 湯もみによる「しぼだて」の工程⁴⁾



図2 小千谷に春を告げる風物詩「雪晒し」の様子⁴⁾

2. 小千谷縮の特性

一般的に夏物衣料に麻素材として使用される繊維の多くは亜麻であるが、日本において古来より栽培されていた麻は大麻や苧麻であったことから、日本各地の伝統的な麻織物には、苧麻が使用されていることが多い。しかし、現在では栽培地域の激減やコストの問題等から、外国産の亜麻や苧麻が使用されるようになった。そのような現状の中で、小千谷縮布は国産の苧麻にこだわり、現在も作り続けられている希少な麻織物である。

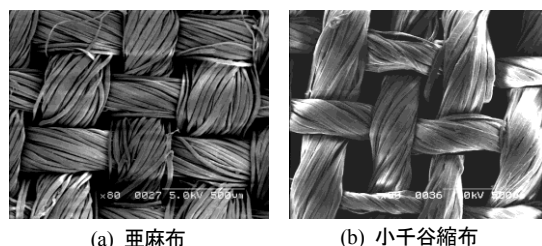
苧麻の繊維は、亜麻の繊維に比べて長く、太く、硬いため、麻の特徴であるシャリ感とコシも強く感じられる^{7,8)}。また、繊維断面が長細いために亜麻には見られない絹のような光沢感があり、そのような苧麻の特性が、小千谷縮に涼感と気品ある風合いを与えている。また、小千谷縮の一番の特徴は、図3にみられるように、表面に小さな皺状の凹凸があることである。小千谷縮布の織り工程において、経糸の下糸に負担がかけられ、緯糸には強撚糸を用いて織られていることで、「湯もみ」「しぼ立て」により経糸が収縮し、それに伴って緯糸の撚りが戻るため、図3のような凹凸のしぼが形成されるのである。図4は、一般的な亜麻布と、小千谷縮布の電子顕微鏡写真である。均質に織られた亜麻布に対して、小千谷縮布は糸の太さや空隙の大きさにもばらつきがあり、強い撚りがかけられている緯糸の方が経糸よりも細くなっていることがわかる。さらに、その撚りが少し緩くなっている様子も確認することができる。

従来から夏の着物地として愛されてきた小千谷縮布であるが、近年は寝装具、インテリア用に涼感素材としての利用が注目されている。そこで、天然繊維で織られた各種市販のシーツ素材と、小千谷縮布の吸湿性及び放湿性を比較してみることにした。

まず、25℃、80%RHの高湿度環境下で吸湿させたところ、図5のように、すべての試料が最初の10分間でかなり吸湿した。小千谷縮の吸湿量が少ないように感じられるが、これは布の厚みや糸密度が他の試料よりも少ないことが影響しているも



図3 小千谷縮布のしぼ⁴⁾



(a) 亜麻布 (b) 小千谷縮布

図4 亜麻布と小千谷縮布の電子顕微鏡写真⁴⁾

のと思われる。しかし、25°C、40%RHで放湿を開始したところ、小千谷縮は他のシーツ素材に比べて、放湿量が大きい傾向がみられた。より詳細にその変化を確認するため、放湿開始後の経過時間毎の吸放湿差（吸湿開始90分後の水分率との差）を図6に示した。放湿開始15分後においても、他のシーツ素材よりも小千谷縮の放湿性が高いことが確認できた。一般に、麻繊維の吸水性は綿繊維には劣るものの、麻織物の場合には綿織物よりも吸水速度及び発散速度が速く、中でも苧麻織物の発散速度は亜麻織物よりも速いことが知られている⁸⁾。小千谷縮布は、一般的な麻織物の中でも生地が薄手であるため、放湿速度が速くなったとも考えられるが、この優れた吸放湿性に着目し、布の構造についてさらに検討をおこない、快適性素材としての小千谷縮布の活用を試みたいと考えている。

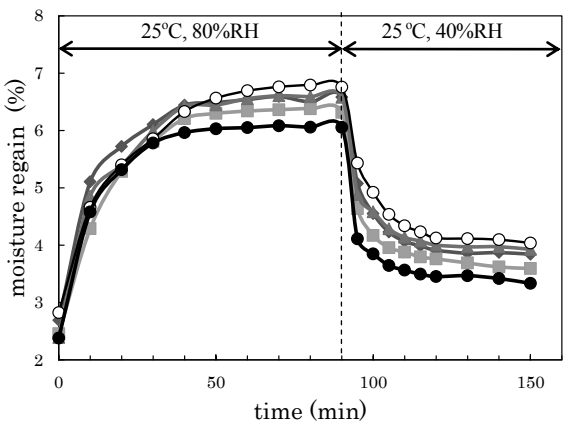


図5 各環境条件下における水分率の経時的変化

- : 小千谷縮布 ○ : 苧麻シーツ ▲ : 綿シーツ
- ◆ : 綿ワッフル織シーツ (8枚綜統)
- : 綿ワッフル織シーツ (16枚綜統)

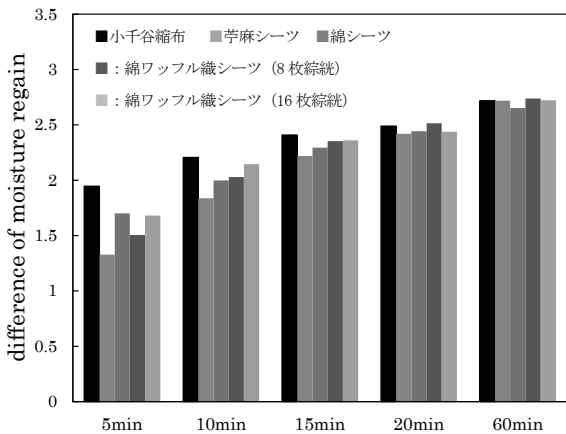


図6 放湿開始後の経過時間毎における吸放湿差
(図5の吸湿開始90分後の水分率との差)

また、麻は気軽に洗濯できる素材であるが、一度ついたシワを取るにはアイロンがけが必要であり、洗濯後に縮みも生じる。しかし、シワ（しぼ）が付与されている小千谷縮においては、シワは気にせずとも良く、したがって洗濯による寸法変化やしぼの保持性が課題となる。そこで、小千谷縮を家庭洗濯機で繰

り返し洗濯をおこなった場合の、縦方向（布目方向）及び横方向の寸法変化率を算出し図7に示した。縦方向では、小千谷縮の寸法変化は少なく、比較試料として用いた綿シーツは、どれも洗濯回数にともなって収縮が生じた。特に密に織られた16枚綜統（そうこう）の綿ワッフル織シーツにおいて、かなりの収縮していることがわかる。一方、小千谷縮の横方向は、縦方向よりも収縮する傾向がみられ、変化にもばらつきがみられた。これは、洗濯後の乾燥方法が、小千谷縮布の特徴であるシボの伸縮に影響していると思われる。一般的に、洗濯による伸縮の可能性のある素材は平干しが推奨されるが、今回は対象をシーツ素材としており、通常の使用方法を考えると吊干しが一般的であるため、本実験においても吊干しで乾燥をおこなった。ただし、濡れた後の乾燥による収縮に逆らって形状を保持してしまうと、小千谷縮布の特徴であるしぼが減少してしまう可能性があることから、吊干しを行う際には自然な試料の収縮（しぼの回復）を阻害しない程度に、弛みをもたせることにした。このことによって、寸法変化に多少のばらつきが生じたと考えられるものの、綿素材のように洗濯回数に伴って徐々に収縮することはなく、したがって、小千谷縮布は乾燥方法にさえ配慮すれば、洗濯による小千谷縮布特有のシボを保持した状態で、何度も使用し続けることが可能であることが示唆された。

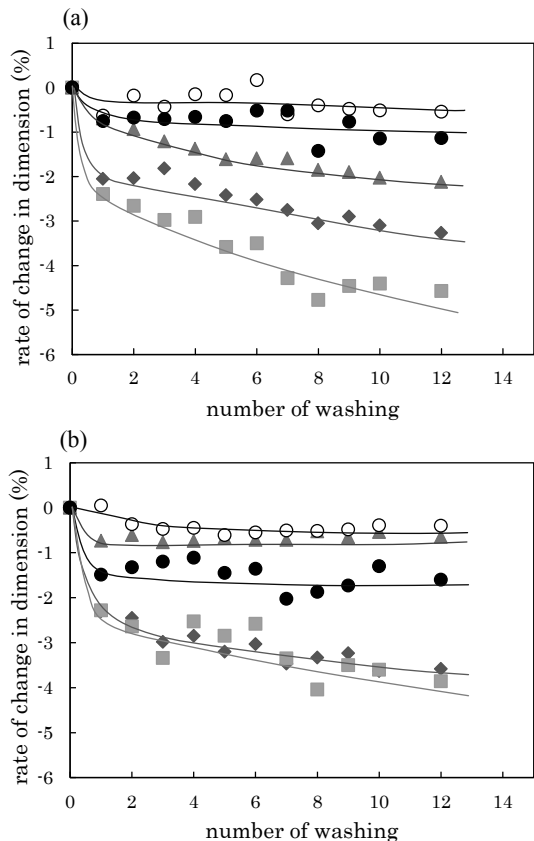


図7 洗濯回数に伴う(a)たて方向及び(b)よこ方向の寸法変化

- : 小千谷縮布 ○ : 苧麻シーツ ▲ : 綿シーツ
- ◆ : 綿ワッフル織シーツ (8枚綜統)
- : 綿ワッフル織シーツ (16枚綜統)

3. 小千谷縮を使用した花嫁衣装

これまで、主に和服地として使用されていた小千谷縮だが、近年は洋服や寝装具、インテリア用品、雑貨等にも使用され、独特のシボによる風合いが楽しまれている。しかし、まだまだ一部の人のみを知る素材であることも事実であり、その発展に努める活動や取組みが現在活発におこなわれている。研究・教育・社会貢献連動型のプロジェクトである「小千谷ブランディング・プロジェクト」⁹⁾は、小千谷市をフィールドに新潟大学の各部局と小千谷市の諸団体、市民が連携し、地域ブランドの構築のために、モノが売れ、人が訪れ、地域内外の人々が交流し、地域に誇りと愛着を持ち「住みたい」「住み続けたい」という気持ちを誘発すべく、『人情と暖かみのあるまち・小千谷』をコンセプトに、その実現に努力をしている。筆者らは、2014年3月15日に開催された「小千谷ブランディング・プロジェクト年度報告会&井戸端意見交換会」（主催：新潟大学長尾雅信准教授並びに長尾ゼミ学生）に参加し、新潟大学の学生達と今後の計画や課題について意見を交えた。プロジェクトの1つである「織物班」では、小千谷縮の体験価値を訴求すると共に、ブランドの再構築に取り組んでおり、若者向けに小千谷縮の浴衣の試作、商品の提案、それらを提供するアンテナショップ等、情報発信の方法についても検討しているところで

あった。筆者らも、研究によって得られた小千谷縮の特性について情報を提供し、その独特の風合いの良さと優れた性能を実感してもらう工夫が大いに重要であることを伝えた。

このような小千谷縮の魅力をより多くの人に伝える取組みは、関係企業でも行なわれており、小千谷の地で長年に渡って縮を作り続けてこられた水田株式会社¹⁰⁾では、自社の販売ショップ「布ギャラリー」にて様々な製品を販売しており、今年春には東京の本郷にショールームを構えることとなった。また、衣装レンタル会社の株式会社とまつ衣裳店¹¹⁾では、図8、9のように小千谷縮を使用してオリジナルで花嫁衣装を製作し、レンタルを開始している。その衣装には、小千谷縮の魅力が充分に取り入れられていることから、この機会に紹介したい。

3-1 色打掛

新潟の県鳥である朱鷺が、小千谷縮布の地色の「朱鷺色」と共に文様に施され、一面に描かれた「枝垂れ桜」は、加工や仕立てがおこなわれた京都の市の花であり、京都の工芸士によって桜の花の一部に金彩加工を施しており、新潟と京都の「ものづくり」を融合させた花嫁衣装¹²⁾になっている。

図8で衣装を着用しているのは、新潟の魅力を伝える地域活性化モデルの今井美穂さんである。彼女は、撮影時における衣



小千谷縮製作：水田株式会社（新潟）
 金彩加工 等：京のそめこうげい音（京都）
 仕立て：華衿（京都）

図8 小千谷縮を用いた色打掛¹²⁾

装の着用感について、“伝統ある小千谷縮を使った花嫁衣装というだけでも気品に満ち溢れた衣装であるが、独特の肌触りと軽さには驚かされた”¹³⁾と感想を述べている。

今回の衣装を企画立案した、株式会社とまつ衣裳店の代表取締役である戸松茂雄氏によると、“近年は和装での婚礼に興味を持つカップルも多いが、何枚も重ねて厚みのある衣装を着る和装を、暑い時期に着ることに躊躇する人もいる。しかし、この小千谷縮で作られた衣装は、軽さと涼しさを兼ね備えており、これからの新しい花嫁衣装として、ぜひ多くの皆様に愛用していただき、新潟の素晴らしい素材を使った商品を今後も開発していきたい。”と語られていた。

筆者らは、この小千谷縮の花嫁衣装の朱鷺色から、可愛らしくも落ち着いた女性の優しさを感じ、柄の朱鷺の羽ばたきから、結婚に対する女性の高揚感が表現されているように感じた。また、小千谷縮特有のシボがあることで、麻素材のハリ感に適度な柔らかさが加わり、上品な風合いに仕上がっており、小千谷縮の魅力が十分に活かされた素晴らしい衣装であると評価している。高温多湿の日本の夏に、見る人にも涼やかな打掛け姿の花嫁衣装は、何よりも軽く、今後大いに需要が期待されると同時に、後世にも残る、伝統工芸として誇れる小千谷縮の一品と言えるであろう。

3-2 ウェディングドレス

白地の小千谷縮を贅沢に使用し、また、縞の特徴をいかになく組み込んだウェディングドレスも製作された。図9のように、麻特有のハリ感は立体的に花やドレープを形作り、豪華なドレスとなっている。企画立案者の戸松氏によると、豪華にみせようとフリルを多めにデザインしたことで、かなりの布量を使用することになり、衣装の重量が増えてしまったとのことである。しかし、ウェディングドレスは白一色であるため、シンプルな

デザインでは小千谷縮のしぼの凹凸を楽しんでもらえないのではないだろうか。今回のデザインのように、布に動きや立体感を持たせることによって、光に照らされた時にしぼの凹凸が際立ち、小千谷縮がもつ独特の質感を視覚的にも楽しめ、小千谷縮ならではの魅力を感じることができるといえるウェディングドレスになったと思われる。

4. むすび

「小千谷縮・越後上布」がユネスコ無形文化遺産に評価されたのは、昔ながらの苧麻を用い雪国文化の特質を活かした古法を伝えている貴重性にある。小千谷縮の製作工程では、苧麻の糸の績み、手くびり、染織、湯もみ、しばだて、雪晒しなど、様々な手仕事の積み重ねによって作り上げられており、その貴重な技法とその価値を後世に伝えていくことは、我々日本人のモノや自然に対する想いや考え方といった、日本文化の良さを残すということにもなる。しかし、このような日本の文化的財産の伝承は、日本の生活様式、地域経済、技術革新などの大きな変化や、後継者の不足により危機的な状況になっている場合がほとんどである。

上布・縮産業にも、絹糸を用いた交織、効率的な織機の導入、均質で織り易い苧麻の紡績糸（ラミー糸）の輸入など、合理的な生産方法や機械化の波が押し寄せてきた。しかし、紡績糸は織り易くても績み糸より風合いに劣り、いざり機で織る場合は、細くて切れやすい経糸の張力に注意を払って織るため、機械では得られない風合い豊かな布が得られる。もちろん、多くの手間や時間を要してしまうが、昔ながらの技法によって作り手の誇りと想いが宿った価値あるものが生み出されるのである。今回紹介した花嫁衣装にも、製作に係わった全ての人の小千谷への愛が込められており、その想いが衣装の価値として、まだ小千谷縮を知らない人々に少しでも伝わることを期待したい。



小千谷縮製作 : 水田株式会社 (新潟)
 デザイン : 株式会社とまつ衣裳店 (新潟)
 デザイン・縫製 : オリジナルドレスアトリエ SOMETHING NEW (京都)

図9 小千谷縮を用いたウェディングドレス¹²⁾

謝辞

いつも快く、小千谷縮に関する情報及び試料をご提供してくださいます、新潟県小千谷市の水田株式会社代表取締役社長の水田育夫様と、花嫁衣装に関する話をお聞かせいただいた株式会社とまつ衣裳店代表取締役社長の戸松茂雄様に心より深謝申し上げます。

また、本実験にご協力いただいた生活環境学科奥野研究室平成25年度卒業生の藤田かおりさんに感謝申し上げます。

注および参考文献

- 1) 中江克己 編: 縮と上布 心で織る素朴な布, 泰流社, 177-179, 188, 1975
- 2) 石田賢治, 池敏雄, 上村昭一, 他 5 名 編: 小千谷 織物の歩み, 小千谷織物同業協同組合, 14,16, 2002
- 3) 財団法人綾玄社 編: 重要無形文化財 小千谷縮・越後上布, 重要無形文化財「小千谷縮・越後上布」展実行委員会, 13, 87, 88-93, 96, 2010
- 4) 筆者撮影による写真及び画像
- 5) 榎本一郎, 武田浩司, 長尾梨沙, 他 6 名: 東京都立産業技術研究センター研究報告, 8, 84-87, 2013
- 6) 小林孝之, 浅野春香, 山本周治: 繊維機械学会誌, 63, 374-377, 2010
- 7) 軍司敏博: 日本家政学会誌, 40, 307-312, 1989
- 8) 大川治次: 繊維機械学会誌, 33, 77-84, 1980
- 9) 小浦方格, 長尾雅信, 佐々木教真: 日本地域学会第 50 回年次大会学術発表論文, 2013
- 10) 布ギャラリー IONO 水田株式会社: <http://www.iono.jp>
- 11) 株式会社とまつ衣裳店: <http://www.dress-navi.com/>
- 12) 写真及び情報提供: 水田株式会社, 株式会社とまつ衣裳店
- 13) 今井美穂: <http://ameblo.jp/mi-ho000/entry-11727921919.html>